

No.27

アンカー

# Anchor

「キリストは、ご自分の死によって開始された働きを、復活後、天において完成するために昇天されたのである」大争闘下222



至聖所

聖所

十字架

- クリスチャン品性の完成を信じる者は完全主義者か?
- ローマ・カトリックは変わったか?

アンカー-27号 2000年12月 発行

## アンカーの目的

われわれは次のことを信じてアンカーを出版している。

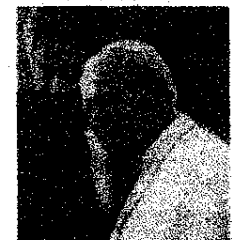
1. 我々セブンスデー・アドベンチストの働きと使命は三天使の使命である(6T384, 2SM142)。
2. 三天使の使命は人々を再臨の栄光の前に立ちうる特別な備えをさせるものである(9T98, 大下140, 396, 397)。
3. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいてしんじは最後の、特別なあがないを受ける(初文414, 415, 417)。
4. われわれは神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な体験を拒み続けてきた。特に1888年以来(RH8-26, 1890)。
5. ダニエル8:14の聖句は再臨信仰の土台であり、み業完成はこの聖句の正しい理解にかかっている(生き残る人々、422, EV221, 5T575)。
6. E.G.ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である(1SM36)。
7. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー(錨)は、三重の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証、(預言の霊)等である(初文417, 1T300)。
8. アンカーはリレーの最終走者の意味がある。この世代は福音の働きが信者の中と、外の世界に完成する最後の時代である。不信仰によって、156年以上も時が延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している(大下182, 教育328)。信仰による義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。み業完成を遅らせている原因を追求し、我々の義務は何かを共に学び備えたいと思う。

「全組織に情報を伝える脳神経は、天が人間と交わり、人の内なる生活を感化する唯一の媒介である。神経組織の電気の流れの循環を妨げるものは何であっても活力を弱め、その結果は精神の感受性を麻痺させる」 2 T 347。

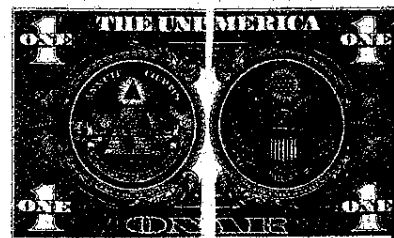
「人体の不思議—わたしたちは神の作品です。わたしたちは、「恐るべく、くすしく造られた」とみ言葉は述べています。神はわたしたちの心(mind—精神)のためにこの生きた住居を備えてくださいました。それは「[不思議に] つづり合わされ」、主ご自身が聖霊の住まわれる所として準備なされた宮です。心(mind)は人間全体を支配します。わたしたちの行動は、善であれ悪であれ、みな心に源を持っています。神を拝し、わたしたちを天の存在者に結びつけるのは心(mind)です。それなのに多くの人は、心(mind)というこの宝物を入れる容器[人体]について理解しようとしなくて、一生を過ごしてしまいます。

身体の器官はみな心(mind)のしもべです。そして神経は、身体の各部に心の命令を伝達し、生きた機械の動作を導く伝令です。身体の構造を研究するときには、目的に対する手段のふしぎな適応性や、各種の器官の調和的な活動と相互依存に注意を向けなければなりません。生徒の興味をこのように目ざめさせ、体育の大切なことを理解させることができれば、教師は生徒の正しい発育と正しい習慣を確保する上に大いに役立つことになるのです」 家庭の教育386。

20世紀のサンセット、21世紀の夜明けが目前に迫って参りました。新しい時代のスタートは、数字のキリがいい2000年なのか、21世紀の正式スタートとされる2001年なのか。これが西暦1599年頃から西暦2000年の現在まで、400年余りに渡って延々と続けられ、いまなお混乱を引き起こしている「世紀の大論争」であることをインターネットで初めて知り驚きました。新聞、雑誌でも、国々によってもまちまちだそうです。日本では公式のスタートは2001年とされています。カトリックの総本山バチカンでは、2000年をキリスト生誕2000年の「大聖年」として、99年のクリスマスイブの深夜から1年余り続く行事が始まりました。さらに、聖書に書かれた「至福1000年紀」が2000年に訪れるとする信仰的立場を持つ人々も存在するそうです。このため、新しい千年紀(ミレニアム)のスタートは、2000年だとする受け止め方がキリスト教圏では強いとのこと。



新世紀は今年からとしても、来年からとしても、今後はバチカンを軸として「至福千年期」、平和の千年期というムードで世界は踊らされるでしょう。つまり、国の内外及び天地に平和がもたらされるようにとの願いをこめた世界的「平成」ムードです。キリスト教大連合、いや宗教大連合となって大革命が起こっています。しかし、預言の民は地上歴史6000年、いよいよ終末の「終わりの時」に入ったことを知るべきではないでしょうか。「ちょうどノアの時のように」終末感が神の民から消えかかろうとするその矢先に終わりは来るのです。



ルシファーの目がデザインされた1ドル紙幣、下にラテン語で「ノバス・オード・セクロラム」=新世界秩序と書いてある。

12月13日ついに、アメリカのかつてない大統領選

拳の乱戦の結果を世界の人々は見せられました。何かが水面下で起こっているに違いありません。ブッシュ新大統領はキリスト教連合の票をとるため、日曜日には選挙運動をしないと公表したそうです。彼の父はちょうど10年前に大統領になったとき「新世界秩序の新しいそよ風が吹いてきた」と言いました。「新世界秩序」という言葉は、バチカンの構想です。1ドル紙幣にある「新世界秩序」がこのブッシュ新大統領の政権の時に実現するのでしょうか。そんなことは起こり得ないと誰が言えるでしょう

か。

今年9月上旬に世界各国の首脳を集めて国連本部で開催された「ミレニアム世界平和サミット」に続いて、世界中の宗教指導者から21世紀の世界人類への提言を行うための世界会議が、9月28～31日に、ニューヨークの国連本部総会議場ならびにアストリアホテルを会場に開催され、世界各国から1000名近い宗教指導者が国連に招かれました。世界宗教者平和会議が国連で催されたことは初めてのことです。しかも、かつてないほどの代表者が集まりました。コフィ・アナン国連事務総長は21世紀の世界統一政府には宗教が絶対に必要であることを訴えたとか。トインビーは「21世紀は宗教の世紀」と言ったそうです。とすると国々の政治家も、宗教家も当然ローマ法王に期待するでしょう。世紀の大伝道者ビリー・グラハム、生き仏として崇拜されているダライ・ラマ、教会成長で有名なロバート・シューラーも揃って法王を賞賛し、支持しています。

日曜休業令が米国の先導で全世界に強要される時が来ると、神もまた働かれる時です(詩篇119:126)。その時、「迫り来る戦い」から「最後の戦い」に移ります。「しかし、私たちがサタンの外部的な戦いから救われるに先立って、サタンの内部的な力から救われなければならない」(実物教訓155)とされています。「人間である限り罪からの完全な解放はない」というのは、神の福音に見いだせない思想です。

「わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、わたしたちを、その父なる神のために、御国の民とし、祭司として下さったかたに、世々限りなく栄光と権力とがあるように、アメン」黙示録1:5-6。

「わたしは主を待ち望みます、わが魂は待ち望みます。そのみ言葉によって、わたしは望みをいただきます。わが魂は夜回りが暁を待つにまさり、夜回りが暁を待つにまさって主を待ち望みます。

イスラエルよ、主によって望みをいだけ。主には、いつくしみがあり、また豊かなあがないがあるからです。主はイスラエルをそのもろもろの不義からあがなわれます」詩篇130:5-8。

「願わくは主があなただを祝福し、あなたを守られるように。  
願わくは主がみ顔をもってあなたを照し、あなたを恵まれるように。  
願わくは主がみ顔をあなたに向け、あなたに平安を賜われるように」民数記6:25,26

## クリスチャン品性の完成を信じる人は完全主義者か

我々は、再臨前のクリスチャン品性の完成を信じる。それを説くために、「完全主義」だと非難されることがある。ある人は次のような引用文を我々に当てはめている。

「神は、いわゆる完全主義（付録参照）や精神主義と呼ばれる誤りに以前に陥って、その心と判断力が弱くなった人々に、神の尊い群れを養うことをお委ねにはならない。彼らは、こうした誤りに陥っていたときの行為によって、自分自身をはずかしめ、神のみわざに非難を招いたのである」（初代文集 196）。

これは「クリスチャン品性の完成」を説くことに対する非難、警告なのだろうか。もし、そうだとすれば、聖書記者も、E.G.ホワイトも同じように非難されなければならない。なぜなら、彼らは品性完成に向かって進むように勧め、しかもキリストの再臨を迎える前に品性は完成することを説いているからである。

### 完全主義とは？

まず、「完全主義」とは何かを定義しなければならない。同じ著者が最も良い定義をしている。

「完全主義——1844年の経験のしばらくあとで、初期の再臨信徒の中には、神を見失って、狂信主義に走った人々があった。エレン・ホワイトは、このような極端主義者に対して、『主はこう言われる』をもって答えた。肉における完全な状態に達したのだから罪を犯すことはありえないと教える人々を、ホワイト夫人は譴責した。そのような人々について、ホワイト夫人は、後に次のように書いた。

「『清められた者は、罪を犯すことができないと彼らは考えた。そして、これは当然のことながら、清められた者の愛情や欲望は常に正しく、彼らを罪に陥れる危険は決してないという思いを抱かせた。こうした詭弁のもとに、彼らは、聖潔という衣のかけで最悪の罪を行っていた。そして彼らは、その欺瞞的催眠術の影響によって、彼らの仲間のある人々に対して不思議な力を及ぼしていた。彼らは

一見立派ではあるが、欺瞞的なこうした説の害悪を見ることができなかった。

これらの偽教師たちの欺瞞が、はっきりとわたしの前に示された。そして、わたしは、記録の書のなかに、彼らに対して恐るべきことが記されているのを見た。そして、その日常の行為が、神のみ前に憎むべきものであるにもかかわらず、完全な清めに到達したと主張する人々に負わせられる恐るべき罪を、わたしは見たのである』初代文集 487,488 (付録 96 ページ)、(ライフスケッチズ 83,84 ページ)。

上の引用文をまとめてみよう。

1. 「完全主義」は狂信主義で、極端主義である。
2. 「完全主義」は、肉における完全な状態に達したのだから罪を犯すことはあり得ないと教える。
3. 清められた者は、罪を犯すことができないと考える。
4. 清められた者の愛情や欲望は常に正しく、彼らを罪に陥れる危険は決してないという思いを抱く。
5. 日常の行為が、神のみ前に憎むべきものであるにもかかわらず、完全な清めに到達したと主張する。

つまり完全主義者とは、自分には罪がない、完全に清められてもう罪を犯すことはないと主張する人々である。再臨運動の初期にそう主張する者が多く現れた。主の僕はそれらの人々に対して厳しい警告を与えられた。同じようなことが 1900 年の初頭にも起こった。「聖なる肉」という狂信であった (2 SM 32)。

神の民は、決して自分自身で完全を主張することはしない。罪を犯す可能性はないと思うことさえしない。

証の書を調べると次のようなことが分かる。

「罪がないと主張する」ことについて証の書に合計 15 回言及されている。

“claimed to live without sin” 「罪なくして生きると主張する」という表現が 2 回、“claim to be holy and sinless” 「清く、罪がないと主張する」と言う表現が 3 回使用されている。

「聖なる民は罪がないとは主張しない」(2MR 348)。

「ヨハネは真の聖化の祝福を楽しんだ。しかし、彼は決して罪がないとは主張し

なかったが、完全をもとめていたことに留意しなさい」(SL 65:1)。

## クリスチャン品性の完成とは？

しかし、聖書ははっきりこう言っている。

「そして主が審判の霊と滅亡の霊とをもって、シオンの娘らの汚れを洗い、エルサレムの血をその中から除き去られるとき、シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあって、生命の書にしるされた者は聖なる者となえられる」(イザヤ書 4:3)。

「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままとさせよ」(ヨハネの黙示録 22:11)。

聖徒たちは自分自身を聖なるものとは思わないし、主張しない。しかし、彼らは清いのである。神が彼らのことを罪のない聖なる者と呼ばれるのである。

ソロモンは彼らのことを

「しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」と描写している(雅歌 6:10)。

パウロは完全にされた残りの民のことを

「また、しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためである」と言っている(エペソ人への手紙 5:27)。

また、ヨハネは、生きて主を迎える十四万四千人のことを

「小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた。..... 彼らは、御座の前、四つの生き物と長老たちとの前で、新しい歌を歌った。この歌は、地からあがなわれた十四万四千人のほかは、だれも学ぶことができなかった。

彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった」(ヨハネの黙示録 14:1-5)。

「わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁

はその用意をしたからである。彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」(ヨハネの黙示録 19:7、8)。

預言の霊は品性の完成をはっきり教えている。

「我々は全力を尽くして、我々の目標、すなわち彼(キリスト)の品性まで到達しようと努めているであろうか。主の民はこの目標に到達したときに額に印を受けるのである。聖霊に満たされて、彼らはキリストにあって完全な者となり、記録の天使は『すべてが終わった』と宣言する」(OHC 150)。

品性の完成の可能性を認めても、罪なき品性という声声を大にして否定する人がある。罪なき品性は卑しい体が栄化される時に初めて可能になるのであって、再臨前には不可能という。そうであろうか。

「キリストがおいでになるとき、我々の品性は変えられない。これらの汚れた肉体は変えられ、キリストの輝かしいお体のように形づくられるであろう。しかし、その時、われわれの内に道徳的变化は起こらないのである」(RH 1888,8-7)。

「品性の改変は主が来られる前に起こらねばならない。我々の性質は純潔で清くなければならぬ」(OHC 278)。

いやしい体の変えられるまでは、罪なき品性は不可能とすることこそ「聖なる肉」の狂信である。イエスはいやしい体で罪のない品性を形づくられた。「肉体はそれ自体神のみこころに逆らって行動することはできない」のである(アドベンチストホーム 131)

### 罪なき完全は主が与えられる(黙 19:7,8)

どんな完全であろうか。単純に預言者に言ってもらおう。

「『かつてなかったほどの悩みの時』が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、一つの経験——今われわれが持っておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験——が必要なのである...

今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて



誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、『この世の君が来る…だが、彼はわたしに対して、なんの力もない』と宣言された（ヨハネ 14:30）。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが、悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである」（大争闘 396）。

神学的説明を要しないはっきりした説明ではないだろうか。イエスがお迎えになる教会はどんな教会であろうか。

「キリストを信じる信仰を通して神のすべての戒めに従う者だけが、罪を犯す前のアダムが生きた、罪のない状態に到達するであろう。彼らはキリストを愛する自分たちの愛を、彼のすべての教えに従うことによって証するのである」（MS 122,1901 年）スタデーバイブル(新)428。

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。マラキ 3:4,エペソ 5:27, 雅歌 6:10 引用」（大争闘下 141）。

これらの引用文は最初に引用した完全主義に対する警告と矛盾するだろうか。否、決して矛盾ではない。

### 「ただあなただけが聖なるお方です」

完全に罪から清められた人は、完全に自分の無である状態に到達するのである。完全に 100%イエスの功績に頼るといふ、人間としての最高の点まで到達するのである。神だけが命と義を持っているのであって、私の内に何もよきものはないというのである。完全とは、人間の無力さ、無価値さを完全に十分に意識し、自分の内によきものがあると意識しなくなることなのである。

イエスは言われた。

「なぜよい事についてわたしに尋ねるのか。よいかたはただひとりだけである」と。（マタイによる福音書 19:17）。

あがなわれた者は、天国でも「主よ、あなたをおそれず、御名をほめたたえない者が、ありましょうか。あなただけが聖なるかたであり、」と歌うのである（ヨハネの黙示録 15:4）。

イザヤと同じようにあがなわれた者は「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ」と讚美するのに疲れないのである（イザヤ書 6:3）。

「神はただひとり不死を保」っておられる（テモテへの第一の手紙 6:16）。神の名ーヤウエー JHWH は永遠に自存するお方と言う意味だそうだ。神にのみ、他に依存しない光、命、義、愛が存在するのである。他はみな被造物で依存しないでは存在できないものなのである。

三育学院で、ある人が PRIDE(誇り、高慢)の真ん中に「I」(私)がある。SIN(罪)の中心に「I」(私)がある。罪とは「I」(私)なのだと説明していたのを思い出す。

オックスフォード辞典は PRIDE(高慢、誇り)とは「自分の質、功績などを自負すること、... それを意識すること」と説明している。

「もしある人が、事実そうでないのに、自分が何か偉い者であるように思っているとすれば、その人は自分を欺いているのである」（ガラテヤ人への手紙 6:3）。

「いったい、あなたを偉くしているのは、だれなのか。あなたの持っているもので、もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらっていないもののように誇るのか」（コリント人への第一の手紙 4:7）。

「だれが、主の心を知っていたか。だれが、主の計画にあずかったか。また、だれが、まず主に与えて、その報いを受けるであろうか。『万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アマメン』（ローマ人への手紙 11:34-36）。

主に何かを与えるとは言っても、我々が主に何を与えられるというのだろうか？ ただ主から受けたものだけなのに。我々の生涯を主に捧げるということは、借りたものをお返しするだけである。もしお返ししなければ、盗んでいることである。

## 天の罪なき住民の完全

罪のない天の住民は、神だけが聖なるお方であるという真理をよく把握した上で「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と倦み疲れることなく讚美している(イザヤ 6:3)。

この宇宙の失われた「一匹の羊」ーこの地球からあがなわれた聖徒たちも大祭司イエスの「最後のあがない」によって罪なき者とされて、罪なき天使たちと同じ思いで「聖

なるかな、聖なるかな、聖なるかな」「あなただけが聖なるお方です」との讚美に加わるであろう。

「わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、わたしたちを、その父なる神のために、御国の民とし、祭司として下さったかたに、世々限りなく栄光と権力とがあるように、アメン」(ヨハネの黙示録 1:4-6)。

神のみ前の天使たちについて次のような描写がある。

「み座の前のセラピムは神の栄光を見ていて、うやうやしい畏敬の念に満たされているので、彼らは自己満足の思いで自分を見たり、自分や互いを賞賛する思いで見たりすることは一瞬もない。彼らの讚美と賞賛は高く上げられた万軍の主のためであり、その衣のすそは神殿に満ちている方へのものである。彼らは、全地が神の栄光で満ちる未来を見て、讚美の勝ち歌が豊かな旋律の聖歌の中で次々に反響する、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主」。彼らは神に栄光を帰すことに満足しきっており、神の臨在の中で、神の是認というほほえみの下、彼らにはそれ以上望むものは何もない。神のみかたちを身につけて、神に仕え、神を礼拝することによって、彼らの最高の大望は完全に達成されているのである (RH 1896年 12月22日)。スタデーバイブル(旧)920。

「天使たちはキリストに栄光と誉れとを帰す。それは、彼らでさえも神のみ子の苦悩を仰ぐことによってのみ安全だからである。天のみ使いたちが背教から守られているのは、十字架の効力によるのである。彼らも十字架による以外は、サタンが墮落する以前の天使たちと同様に、悪に対して安全ではないのである。天使の完全は天において全うされなかった。人間の完全は至福の樂園エデンにおいて失敗に終わった。天国でも、地上においても安全であることを望む者は皆、神の小羊を仰ぎ見なければならない」(ST 1889年 12月30日)スタデーバイブル(新)211。

罪のない者たちは、その安全と保障の為に自分たちの内を見ることをしないのである。全く自分たちの外に安全と保障を見るのである。彼らの意識は、神だけが聖なるお方であるということにあるのだ。完全な依存である。この経験を持続しているから罪がないのである。確かに彼らは聖なる者であるが、それは彼らが被造物として創造者に依存しているからである。被造物として全くその内に聖と義を意識しないことを知らなければならない。

この原則を知るとき、イエスのみ<sup>かたち</sup>像を完全に反映する者たちが(キリストの実物教訓 47)、なぜその善行を意識しないかが分かるであろう。モーセが山から下りて来たとき、彼は自分の顔の輝きを意識しなかった。さばきのときに、主は義人たちに向かって「あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれた」と言われる(マタイによる福音書 25:35,36)。しかし、そのとき義人たちは「『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』(同 25:37-39)と尋ねるのである。善行を誉められ、その報いが与えられるが、彼らは自らの善行を意識しないのである。

ルシファーは、命と義が神から来ることを確かに知っていたであろう。では、ルシファーの罪はどこから来たのであろうか。誇り(PRIDE)からである(エゼキエル 28)。被造物のうちで彼ほど、知恵と美しさに恵まれた者はいなかった。しかし、ルシファーは自分の内に善を意識するようになった。自分の内に何も悪いものはない。何も命と義のために神に依存する必要はないと思うようになった。この思いを他の天使たちに言いふらした。我々の内に正しい意志があるではないか。なぜ神に依存しなければならぬのかという彼の議論に3分の1の天使が説得された。神は光と義と命であったが、ルシファーは神のようになりたかったのである。神のように他に依存しない、有って有るものという立場に自分を置くことを欲したのであった。これが罪の始まりであった。

彼はもっともらしく神聖ぶった衣で、背教を覆い隠していた。自分の内にある善に功績があるという性善説、ニューエイジ主義、ユダヤ主義、ローマ・カトリック主義、ラオデキヤ主義の思想のルーツはここにあったのである。神の義が我々の内にある故に、絶えず神のみ子イエスに頼る必要はないというのである。

「この偉大な天使の栄光のすべては神から与えられたものであったにもかかわらず、彼はそれを自分のものであるかのように思うようになった。彼は、天の軍勢に勝る大いなる誉れを受けていたが、自分の地位に満足しないで、創造主だけに向けられなければならない尊敬を受けたいと望むようになった。彼は、神をすべての被造物の愛と忠誠を受ける最高の方とするかわりに、自分で彼らの尊敬と忠

誠を受けようと努めた。そして、この天使のかしらは、無限の父である神がみ子にお与えになった栄光を欲しがり、ただキリストだけが持つておられた力を自分のものにしようと熱望した。...

神のみ子の至上権に異議を唱え、そのことによって、創造主の知恵と愛とを非難することが、この天使のかしらの目的となっていた」(あけぼの上 4,5)。

この精神がまさしくローマ法王教に表されて、この地上の至上権を過去において樹立したことがあったし、今度は全世界的に「新世界秩序」を樹立しようとしているのである。これこそまさに「サタンの代表者」であり、「サタンが生んだ一大傑作」なのである(大争闘上 44)。

ルシファーは内在する自分の義によって神から独立して生きられると思い、「光を担う者」が暗黒の君、サタンとなったのである。

### この地上で、再臨前に学ぶべき教訓

「自分の無価値(nothingness)なことを知って全く神により頼む魂ほど、一見無力に見えるが、真にこれほどに打ち勝つことができないものはほかにない」(国と指導者上 143)。

後の雨一大いなる叫びをもたらすはずの1888年のメッセージの神髄は、それであった。つまり、「我々の無」と「キリストはすべて」である。彼はすべてであったし、そして永遠にわたってそうなのである。

この教訓は「我々が学ぶのに手間取り、また学んでもすぐ忘れがちな真理」と言われている(希望上 97)。そのために、神は聖所でその教訓を分かりやすく教えられた。

### 聖所で学ぶ

「**自分は無(nothingness)**」 — 「**キリストはすべて(everything)**」  
= 信仰による義認

1. 罪人は「いさおなき我」の思いで、開かれた門から祭壇に向かって行く。世の罪を取り除く神の小羊に「ただ頼りゆく我が身を」ささげる。流されたキリストの血、注がれる血だけが我々の罪を赦し、罪から解放するのである。外庭の経験は、一方的に神から提供される義を信仰によって受け入れるとき、罪から清められ、

解放され、自我に死に、キリストと共に甦って神に献身、服従することを教えている。

「我々は無(nothingness)—キリストはすべて(everything)」を学び始める。

2. この信仰による義認の経験を持続するために聖所に入る。

香壇でたく香は何を教えるのだろうか。

「宗教的奉仕、祈り、讚美、罪を悔いた告白は天の聖所に香として真の信者から立ち昇るのであるが、人間の墮落した通路を通り過ぎるとき、それらが汚されるので血によって清められなければ、神のみ前に決して価値あるものとはならないのである。それで、神のみ座の右におられる仲保者がその義によってすべて清めてささげるのでなければ、神に受け入れられるものとはならない」(1SM344)。

どんなに聖化の経験が深くとも、自分の宗教経験、行為は神のみ前で何の功績もないのである。そのために祭司は、血を垂れ幕に七度注ぎ、香をたいて執り成したのである。

「我々は無(nothingness)—キリストはすべて(everything)」を学び続ける。

3. この信仰による義認の完成のために至聖所に入る(大争闘下 216 参照)。

大祭司は香ばしい薫香を両手いっぱい取って、血を七度注ぐ。永遠に完全な聖なる神のみ前で死を免れるためである。

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」(レビ記 16:30)。

信仰による義認の完成である。悔い改めの完成である(2T505)。

日毎の赦しの経験をしてきた者たちであるのになぜ、この贖いの日にさらに清められる必要があるのであろうか。罪の記録が残っているからである。罪深さが残っているからである。神に近づけば近づくほどますます自分の無価値さと罪深さが見えてくる。キリストの功績に頼らなければ滅びるばかりだという意識がますます強くなる。罪深さの意識と聖霊の働きの強さは比例する。

だから、「魂を悩ます」と表現されているのである。聖霊は、我々が無価値で罪深い者であるという意識をますます深く示す。聖徒はますます心へりくだるのである。贖いの日は、大祭司の仲保に全くすぎる深い経験をする日なのである。

「これはあなたがたが永久に守るべき定めである。すなわち、七月になって、その月の十日に、あなたがたは身(魂—欽定訳)を悩まし、何の仕事もしてはならない」(レビ記 16:29)。

この「最後のあがない」を終えるとイスラエル人は、「あなたは良き印を受けただでしょうね」と互いに挨拶したそうだ。神の印を受けること、すなわち品性の完成は自分の無価値さを完全に十分に知ることなのだから、自分の内に罪がないとか、完全に清められたなどとは主張しない。意識さえしないのである。

外庭の経験も、血とささげものの香ばしい香りの故に罪人は神に受け入れられた。

聖所でも血が注がれて香がたかれ神のみ前に立ちのぼった。民はあがないの血に絶えず依存していることを象徴していた(あけぼの上 415 参照)。

至聖所でも血が七度贖罪所の前に注がれ、薫香の雲に贖罪所を覆わせた。人間のどんな聖さも神の前に何の価値もなく、キリストの功績にのみ望みがあることを教えたのである。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神」と栄光を神にのみ帰すことを教えるために、外庭、聖所、至聖所での経験が必要なのである。レッスンワン、レッスンツー、レッスンスリーとあがないの段階が用意されたのである。至聖所での最後の教訓を学び終わると、主は印された民、<sup>かたち</sup>み像を完全に反映する民を迎えにおいでになるのである。

## ローマ書に学ぶ

「**自分は無(nothingness)**」—「**キリストはすべて(everything)**」

**=信仰による義認**

信仰による義認が最も組織的に説かれているのは、ローマ書である。

1. 3~5章までは価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって、その血により義とされることを教えている(3:24-25)。

一方的な神の無償の賜物を、人はどのように受けるのだろうか。「信仰をもって受くべき」ものとされた(3:25-26)。信仰以外にない。「すると、どこにわたしたちの誇があるのか。全くない」(3:27)。

それなのに与えられた神の義を、聖を、清めを誇るようなことがあれば、またルシファアの罪を犯すことになる。「もし自分をキリストにささげ、キリストを自分の救い主として受け入れるならば、その生涯はこれまでいかに罪深きものであっても、かれのゆえに義とみなされるのであります。キリストの品性があなたの品性の代りとなり、神の前に全然罪を犯したことの無いものとして受け入れられるのであります」(キリストへの道 82)。

何という驚くべき宣言であろう。法的に義認されるのである。義認とは赦しである(OHC 51.2)。

「信仰による義認とは何か。それは人の栄光を塵に伏させ、自分自身では何もできない人間のために、代わってなされる神の働きである」(TM 456)。

2. 6章と7章で義認=ゆるしは心の根本的变化(radical change, 徹底的変化)をもたらす。

罪からの清め、解放をもたらす。自我に死ぬ経験である。

「こればかりでなく、キリストは私どもの心までも変えてくださいます。信仰によって、キリストは心のうちに住みたまいます」(キリストへの道 82)。

「神の許しは、罪の宣告からわたしたちを解放する法的行為であるばかりでない。それは罪の許しであるだけでなく、わたしたちを罪から救うことである。心を変えるものは、あふれる贖罪的愛である」(祝福 143)。

つまり、パウロは罪からの解放を伴わない義認というものはないと説いている。

3. 8章で、罪許され、罪から解放され、自我に死んだ者は、神に全く献身し、服従するのである。

「こういうわけで、キリスト・イエスにあり、肉に従わず、霊に従って歩む者は罪に定められない(欽定訳)」(8:1)。一言で述べるなら、服従である。

「これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである(8:4)。

服従を伴わない義認は偽物である。服従は「信仰による服従」である。ローマ書 1:5 は「信仰の従順」で始まり、16:25 において「信仰の従順」で終わっている。つまり、信仰の服従である。



「尊いのは、愛によって働く信仰だけである」(ガラテヤ 5:6)。「faith which works by love」愛によって働く (works) のである。信仰は服従となって働く(works)のである。

これらの三つの経験は、キリストのもとに来るとき一度にパッケージ(セット)として与えられるものであって、信じて許されて、都合を見て罪から離れ、そのうち服従するというものではない。もし、罪と知りながら、罪から離れず、それを捨てず、知っていて神の戒めに従わないなら、まだ義認の経験は保留されているのである。

「罪についての真の自覚もなく、悔い改めの必要も感じない。自分たちが神の律法の違反者であるという失われた状態を悟らず、キリストの贖罪の血の必要を自覚しないのである。心の根本的変化も生活の改変もなしに、救いの希望を受け入れる。このような表面的改心が広く行なわれていて、キリストと結合したことの多い多くの者が教会に加えられているのである」(大下 196)。

### 三重の使命に見る

「**自分は無 (nothingness) —キリストはすべて (everything)**」

**=信仰による義認**

信仰による義認は「第三天使の使命そのものです」と預言者は言った(1SM372)。

第三天使の使命というとき、第一天使、第二天使を含めて使われることがある。

#### 1. 第一天使の使命—義認=ゆるし

第一天使の使命は、さばきの時が来たと叫んでいる。

神のさばきの前に誰が立つことができよう？ギリシャ人もユダヤ人も神の律法を完全に守っている人はいない。「全世界が神の裁きに服する」(ローマ書 3:20)。誰一人神のみ前に義とされる人はいない。

詩篇記者は次のように叫んだ。

「主よ、あなたがもし、もろもろの不義に目をとめられるならば、主よ、だれが立つことができましょうか」(詩篇 130:2)。

さばきの前に立てる根拠はどこにあるだろうか。答えは次の聖句にある。

「しかしあなたには、ゆるしがあるので、人に恐れかきこまれるでしょう」(詩篇 130:4)。

第一天使の使命は、我々の唯一の望みがキリストにあることを示している。至聖所で「父よ彼らをおゆるしください」と最後の執り成しをなさっている神の小羊、我々の大祭司を仰いで生きよと訴えているのである。

心貧しく、悲しんで、義に飢え渴く人々に至聖所から訴えている。ローマ書 3~5章にあるように、ただ神の恵みにより、価なしに、イエス・キリストにより、その血によって義とされるのだと説いている。だから「永遠の福音」と言われているのである。

神のさばきの法廷に出廷する者は、自分たちの罪深さと無価値さを完全に十分に見せられて今にも絶望するばかりである。彼らの唯一の希望は神の憐れみだけである(国と指導者下 193 参照)。

また、第一天使は「神をおそれ、神に栄光を帰せよ」とも叫んでいる。

「主よ、栄光をわれらにではなく、われらにではなく、あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、ただ、み名にのみ帰してください」(詩篇 115:1)。

とすると、自分は無価値(nothingness)―キリストはすべて(everything)=信仰による義認の教えであることが分かる。完全にして永久的なゆるしである。

## 2. 第二天使の使命にバビロン=自我からの清め、解放を見る。

ルシファーの罪は PRIDE―誇りから生じたことを先に述べた。「わたし、わたし=I」を中心にした生き方、自分の義、能力を誇るのである。

「あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。北の果なる集会の山に座し、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』」(イザヤ書 14:13-14)。

バビロンの根本原則も同じである。

「王は自ら言った、「この大いなるバビロンは、わたしの大いなる力をもって建てた王城であって、わが威光を輝かすものではないか」(ダニエル書 4:30)。

ラオデキヤの誇りも同じである。

第二天使も、ローマ書 6, 7 章と同じように自分の内に支配権をふるっている自我からの解放を呼びかけている。自己称揚、自己過信、自己顕示、自己を義とする精神からの清めである。完全な永久的な解放である。

最大の敵は「自己」である。ルターは「我々が一番恐れねばならないのは“Pope <sup>ポープ</sup> <sup>セルフ</sup> Self”自己という法王である」と言ったそうだ。

第三天使の使命は信仰の服従という経験にあずかるよう招いている。

「ここに神の戒めを守り、イエスの信仰を守る聖徒の忍耐がある(欽定訳)」(黙 14:12)。

### 3. 第三の天使はどこを指してそう言っているのだろうか。

「『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる」(初文 414)。

至聖所の大祭司は何をなさっているのだろうか。

「仲保者イエスは、彼の血を信じる信仰によって勝利したものがみな、その罪を許され、再びエデンの家郷にもどって『以前の主権』を彼とともに継ぐ者となるように、嘆願されるのである(ミカ書 4:8)。サタンは、人類をあざむき、誘惑することによって、人類創造における神のご計画を挫折させようと考えた。しかし、キリストは今、人間が墮落しなかったかのように、この計画の実行を求められるのである。キリストは、ご自分の民のために、完全で十分な許しと義認だけでなく、彼らが、ご自分の栄光にあずかり、ともにみ座につくことを求められるのである」(大下 216)。

我々のために「完全で十分な許しと義認」を懇願しておられる。どういう意味だろうか。さばきに出廷する聖徒たちの許しと義認は完全で十分ではないのだろうか。

「罪人の代わりに、その身代わりとなるものが受け入れられた。しかし、犠牲の血によって罪が取り消されたわけではなかった。こうした方法によって、罪が聖所に移されたのであった。罪人は、血のささげ物によって、律法の権威を認め、犯した罪を告白し来るべき贖い主を信じる信仰によって赦しを願っていることを表明した。しかし彼は、律法の宣告からまったく解放されたのではなかった」(大下 134、あ上 420)。

つまり、至聖所における裁きに直面するまで聖徒たちの義認経験は、完成しないのである。国下 193-196 の描写を見ると、彼らは絶望するばかりの自分たちの無価値さと罪深さの意識をもって神のさばきに出頭する。自分の清め、功績に頼るものはない。唯一の希望は神の憐れみだけである。彼らは心の純潔を嘆願する。

すると、どんな素晴らしい祝福が経験されるだろうか。聖書と証の書はこの時のことをいろいろな表現で描写している。たくさんあるが、二、三挙げるにとどめる。

「『彼の汚れた衣を脱がせなさい』という命令が出される。そして、『見よ、わた

しはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』という励ましの言葉が語られる（ゼカリヤ 3:4）。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。.... 今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった。... 聖天使たちが... 忠実な人々に生ける神の印を押していた」（国と指導者下 196）。

この引用文の言っていることをまとめてみよう：

1. 聖徒たちはさばきの時まで「汚れた衣」をまだ着ている。罪の記録と罪深さがまだ残っているからである。
2. さばきの時にキリストの輝かしい義の衣が永久的に着せられる。二度と汚されない。永久に安全なものとなって神に印される。

しかし、注意！ 聖徒たちは決して完全になったことを主張するのではない。

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。『その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる』（マラキ書 3:4）。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、... 栄光の姿の教会』である（エペソ 5:27）。また、その教会は、『しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者』である」（雅歌 6:10）（大下 141）。

なぜ、教会は栄光の姿を反映するのであろうか。自我がないからである。キリストが土の器を通して現されるのである。

第三天使の「ここに神の戒めを守り、イエスの信仰を守る聖徒の忍耐（欽定訳）がある」という言葉には多くのことが含まれている。ローマ書の「信仰の服従」であり、義認（自分は無、キリストはすべて）の経験を持続するので「忍耐」と使っているのである。

「キリストを信じる信仰を通して神のすべての戒めに従う者だけが、罪を犯す前のアダムが生きた、罪のない状態に到達するであろう。彼らはキリストを愛する自分たちの愛を、彼のすべての教えに従うことによって証するのである」（6BC1118）スタデーバイブル（新）428。

『かつてなかったほどの悩みの時』が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、一つの経験——今われわれが持っておらず、また多くの者

が怠けて持とうとしない経験——が必要なのである....。

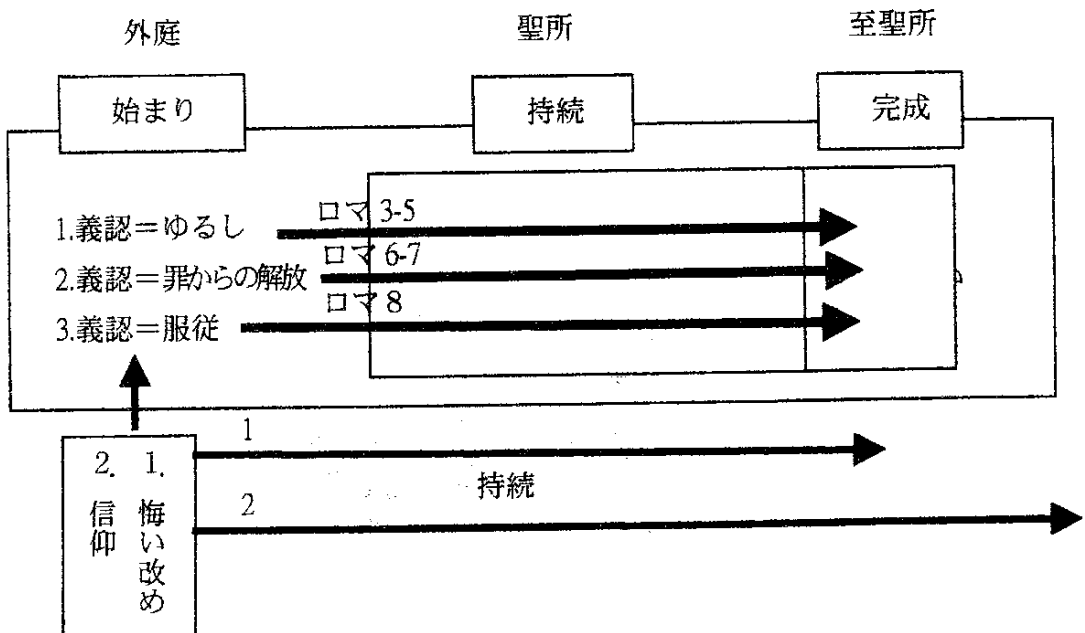
今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない。救い主は、その思いにおいてさえ、誘惑の力に屈服されなかった。サタンは、人々の心の中に、なんらかの足場を見つける。心の中に罪の欲望があると、サタンはそれを用いて誘惑の力を表わす。しかし、キリストはご自身について、『この世の君が来る...。だが、彼はわたしに対して、なんの力もない』と宣言された(ヨハネ 14:30)。サタンは、神の子の中に、彼に勝利を得させるなんのすきも見つけることができなかった。神のみ子は、天父の戒めを守られた。そして、サタンが自分に有利に活用することのできる罪が、彼の中にはなかった。これが悩みの時を耐えぬく人々のうちになければならない状態なのである」(大争闘 396)。

要注意！ 彼らは決して、決して罪がないとは主張しないし、意識もしない。

「このいやしい体が彼(キリスト)の栄光の体に似せて変えられ、形づくられるまでは『私は罪がない』と、我々は言うことができない」(ST 3-23,1888)。

ではいやしい体が栄化されてからは、「自分は罪がない、完全だ」と主張するだろうか。断じてそんなことはない。「ただあなただけが聖なるお方です」「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主...」と叫ぶだけである。

クリスチャン品性の完成といわゆる「完全主義」の間には天地の差がある。



実に人がゆるされ、清められ、完成されるのは信仰によるのである。「神の義はそ

の福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる。これは、『信仰による義人は生きる』と書いてあるとおりである」(ローマ書 1:17)。義認で始まり、義認で完成するのである。

「信仰によって着せられるキリストの功績、義を通して、我々はクリスチャン品性の完成に到達しなければならない」(5T744)。

「彼らは、悪の一つ一つにうち勝つために、またキリストによって着せられる義によって正しい品性を完成するために、聖なる努力を払っていません」(青年 15)。

「主よ、栄光をわれらにではなく、われらにではなく、あなたのいつくしみと、まこととのゆえに、ただ、み名にのみ帰してください」(詩篇 115:1)。

「その日、ユダは救を得、エルサレムは安らかにおる。その名は『主はわれわれの正義』ととなえられる」(エレミヤ 33:16)。



# ローマ・カトリック教会は変わったか？

---

---

## 1. 「決して変わらない！」

「偉大な永遠の方が、何が信仰と教理の規定を構成するかを定められた。主は、聖書が家庭で使われる(なじみの本)となるように計画された。(神の言葉を保持する教会は、ローマに妥協しないで分離した。プロテスタントはかつてこの大背教の教会から分かれたのであったが、しかし、彼らはますます近づき、ローマ教会と和解への道を取っている。ローマは決して変わらない。その教会の原則は少しも変更されてこなかった。ローマは自分たちとプロテスタントとの裂け目(不和)を縮めることはしなかった。進出して来たのはプロテスタントであった。しかし、これはプロテスタントにとって何を意味するだろうか。人を不信心にさせるのは聖書の真理の拒否である。プロテスタントとローマ法王教の間の距離を縮めているのは、背教している教会である」(ST、1894年2月19日)。

「現在ローマ教会は、その恐ろしい残虐行為の記録を弁解しながら隠し、世界にもっともらしい顔を見せている。この教会はキリストのような衣を装っている。しかし教会は変わっていない。過去に存在した法王制のあらゆる原則は、今日も保持されている。最も暗い時代に案出された数々の教理は、今もなお支持されている。だれも欺かれてはならない。

今日プロテスタントが尊敬しようとしている法王制は、宗教改革の時代に世界を支配していたのと同じものである。その時神の民は、自分の生命の危険をおかして、この教会の悪を暴露するために立ち上がったのであった。教会は、かつて王たちや諸侯たちの上に君臨し、神の大権を主張した時と同じ誇りと尊大不遜な心を持っている。今日もこの教会の精神は、かつて人間の自由を押しつぶし、いと高き者の聖徒たちを殺した時と同じに残酷であり、専横である。

また、ローマ教会は決して変わらないということがこの教会の自慢の種であることを忘れてはならない」(大争闘下 340)。

## 2. 変質したのはプロテスタント！

「カトリック教は以前ほどプロテスタントと広く隔たってはいないという主張が、

プロテスタントの諸国において唱えられてきたことには、理由がないではない。そこには変化があったのである。しかしその変化は、法王制の中にあつたのではない。なるほどカトリック教は、今日存在しているプロテスタントによく類似している。それはプロテスタントが、宗教改革者の時代以後、ひどく墮落してしまったからである」(大争闘下 329)。

### 3. セブンスデー・アドベンチストはどうであろうか？

#### アドベンチスト・ニュース・ネットワークより

ワルシャワ、ポーランド (2/15, 2000)

「セブンスデー・アドベンチスト教会は、新宗教、またはセクトと見なすことはできない」とするポーランドのローマ・カトリック教会とセブンスデー・アドベンチスト教会の共同声明が発表された(この要約がライフ誌 2000, 4月号「海外ニュース」に紹介された)。

#### ● ポーランド、ワルシャワのアドベンチスト教団本部

「お互いの自治権と独立を認めつつ、また、お互いの独自性を譲歩することなく、カトリックとアドベンチスト教会の教えと慣習をよりよく理解することをねらい、15年にわたる対話の結果文書が発行された」

#### コメント:

この文は重要な事実を述べている。① セブンスデー・アドベンチストの指導者たちはローマ・カトリックと15年間にわたって対話を進めてきたということ、② この文書の結果は「共同声明」を発表するにいたったということである。

#### ● アドベンチスト・ニュース・ネットワーク

「文書によると『過去においてカトリックとアドベンチストの関係は必ずしもベストではなかった』事実を述べている。両教会の代表、ポーランドのアドベンチスト教会の総理、ウラジスロウ・ポロック牧師とカトリック教会合同司教団長、アルフォンス・ノッスルがこの声明に署名している」

#### コメント:

「過去においてカトリックとアドベンチストの関係は必ずしもベストではなかった」とう発言は、法王教との関係に関するセブンスデー・アドベンチストの新しい立



場を示唆している。つまり、今までのカトリックへの対応を変えたのである。しかも「その声明文は、両教会の代表者によって署名された」ことにも注目してほしい。

### ● 統一アドベンチスト・ニュース・ネットワーク

「この文書は『多くの宗教団体、行政府がセブンスデー・アドベンチストの教会としての地位を拒み、セクトとしているのは遺憾である』としている。『このような対応の仕方は受け入れることができないし、相互の關係に有害(不利)であると信じる』と述べている。この文書は宗教自由を確認している。このことはポーランドにおける我が教会の重要な発展と考えているだけではない。宗教的少数派はしばしば実際より過小評価されている...」

この声明は、両教会の似ている点をあげながら、両者の「教理、慣例、教会の方策」の相違を認めている。しかし、両教会は相互間の尊敬を培い、理解しあうことを学ぶ必要があると確認している。「この対話はパートナーシップ—協力(共同)にもとづいてなされ、各々の自治権、独立と独自性を十分に考慮し、お互いを尊敬しクリスチャンとしての愛の精神、寛容と宗教自由という理想の認識のうちに行われた」

#### コメント:

ローマ・カトリックに抗議し、分離してきたのに、今更どうしてパートナーとなれるのだろうか。「二人の者が賛同(合意)しなければ、どうして一緒に歩くことができようか」(アモス 3:3、欽定訳)。「不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである」(ヤコブ 4:4)。

ローマ・カトリック教会はキリスト教だろうか。一般にキリスト教といえばカトリック教会とされている。神は何と言っておられるだろうか。

「法王制はまさしく、預言の中でこのようになると言われているとおりのもの、すなわち終末時代の背教である(テサロニケ第二・2:3,4 参照)。自分の目的を達成するのに最も都合のよい性格を身に装うことが、この教会の方針の一つである。しかしカメレオンのように変わりやすい外見の下に、この教会はへびのような不変の毒を隠している。『異端者もしくは異端の嫌疑ある者との誓約は守ってはならない』と教会は明言している。一千年にわたるその記録が、聖徒の血によって書かれているこの権力が、今日キリストの教会の一部として承認されてよいであろうか。」(大争闘下 328、329)。

「ローマ・カトリック教会は、異教とキリスト教との形式を結合したものである」  
(大争闘下 326)。

「ついに、キリスト者の多くは、標準を下げることに同意し、キリスト教と異教との間の結合が成立した」(大争闘上 36)。

「異教とキリスト教の妥協が、神に反抗して立ち上がると預言された『不法の者』  
《罪の人—欽定訳》を出現させることになった。偽りの宗教のあの巨大な組織は、サタンの生んだ一代傑作であって、自分の意のままにこの地上を支配しようとする彼の努力の記念碑である...

そして、このようにしてキリストを拒否したことによって、教会はサタンの代表者であるローマの司教に忠誠を尽くすに至った」(大争闘上 44)。

「祈りをもって聖書を研究するとき、プロテスタントは法王制の本性を知り、法王制を嫌悪しそれを避けるようになる」(大争闘下 330)。

「高い犠牲を払って贖った良心の自由に、プロテスタントが高い価値を置いた時代があった。彼らは子供たちに法王教をきらうように教え、ローマと一致しようとすることは神に対して不忠実であると主張した。しかし今日表明される意見は、なんととはなはだしく異なっていることであろう」(大争闘下 318)。

安息日学校教課 2000,2 期、p9

「カトリック教会はこれまで長く自己の正当性を主張し、他を厳しく批判してきました。ところが、同教会は第二バチカン会議(1962-65)で中世以来の過ちを認めたと、対話と協調路線に姿勢を変えました。同じ頃、世界を分けてきた米ソ二大国も対立から平和攻勢へと戦術転換をしています。こうした政治、社会、宗教の傾向の中、キリスト教会全体が今、相互協力を動いています。SDA 世界総会も時代の流れを配慮し、賢明な対応、慎重な姿勢をとるように指導しています。「反対のための反対」はキリスト者らしくありませんし、伝道 上かえって一般の失望、非難を招きかねません。信仰者として協力できる部分と、聖書の教えから何が問題なのかを見きわめ、確認する必要があります」。

世界総会決議(1997年3月、4月)

「アドベンチストは、他者の取り扱いにおいて公平を求める。このように歴史の記録に対する認識と、終末の出来事に関するわれわれの見解を維持しつつも、近年のローマ・カトリシズムにおけるいくつかの肯定的な変化を認め、多くのローマ・カトリック教徒は、キリストにある兄弟姉妹であるとの確信を強調するものである」。

実に巧妙な言い回しである。今までのカトリックに対する対応は間違っていたと言っているのである。ここで、はっきりさせておきたいのは次のことである。カトリックの中の光を求める個人個人と、制度としての教会を区別して考えなければならない。

「ローマ・カトリック教会の中に真のキリスト者たちがいることは事実である。この教会の幾千の者は、自分たちに与えられている最善の光に従って神に仕えている。彼らは、神の言葉を手に入れることが許されていない。

だから彼らは、真理に気がつかないのである。彼らは、生きた、心からの奉仕と、単なる形式や儀式のくり返しとの間の、著しい相違に気づいたことがなかった。うわべだけの、満たされない信仰の中で教育されたこれらの人々を、神はやさしいあわれみをもってごらんになる。神は、彼らをとりにまわっている濃い暗黒に光が射し込むようにされる。神がイエスのうちにある真理を彼らに示されるので、やがて多くの者が神の民とともに立つのである。

しかし一つの制度としてのローマ・カトリックは、この教会の歴史上のどの時代においてもそうであったように、今日でもキリストの福音と調和するものではない。プロテスタント教会は大いなる暗黒の中にある。そうでなければ、彼らは時のしるしを見分けるはずである。ローマ教会の計画や運営方式には遠大なものがある。この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行なったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている」(大争闘下 321)。

そういう考えでカトリックと協調するなら、モルモン教会、創価学会、生長の家、神道、仏教とも協調しなければならない。これらの宗教の中にも光を求めて救われる人々がいるのは事実である。「やがて多くの者が神の民と共に立つのである」(大争闘下 321)。

● 統一アドベンチスト・ニュース・ネットワーク

「これは我が教会にとって重要な出来事の曲がり角である」とポーランドの SDA 広報部長ザカリアス・リコ教授は語る。この成果は非難、公的攻撃、対決の結果ではなく、相互間のクリスチャンとしての親切と人間として威厳を尊重することの結果である。

我々の多くの者は、いろいろな名前でレッテルを貼られてきた。我々は誤解され、しばしばあざけられてきた。我々は、互いに膝を交え、我々の属する社会においてキリスト者としての愛は違った種類の関係を要求することを望んできた。セブンスデー・アドベンチストとして我々は、他宗派に対する積極的な対応の仕方を求めている。我々はこのことを公的に発表してきたし、この文書は我々の態度を確認するものである。

この文書は、教理的、神学的問題を取り扱ってはいない。数年間の会合で、両方の信仰告白の間に良き理解のためにと両教会は各々の神学的見解、教理的立場を提示してきた。『我が教会はこのような対話は妥協のそれではなく、協力の精神と共通の理解のためのもの』であるとリコ教授は説明している。『我々は我が教会の初期の開拓者たちが支持し擁護したこと以外は何も違ったことをしているわけではない。望ましい変化の達成をしばしば妨げる対決よりは尊敬すべき話し合いをすることがいつでも望ましかった』と彼は語った。

リコ教授はまた、『教会として、我々は我々の基礎信条のどの点においても妥協することには関心がない』と語った。

しかしながら、何年もの間、お互いの情報交換がなされてから、我々は信条に多くの似ている点があると同時に相違もあることを認識しあった。カトリック側は文書の中に我々の信条がキリスト中心の性質のものであることを認めている。特に三位一体や教会の独自性を確認している。ポーランドの議会法令で認めている。我々は我が教会の態度を変える必要について語りそしてカトリック教会が開かれた教会である一特に近年、聖書に対して解放的であることを認めた」と同教授は語った。[レーイ・ダブロスキー記]

#### コメント:

「多くの似ている点がある」ということでパートナーになっていいものだろうか。ローマのねらいは何であろうか。彼らにとっての「エキュメニカル」は一致でもなければ、合同でもない。「再帰」なのである。つまり、「わが子らよ、帰ってきなさい」ということである。今日、法王による世紀末の「謝罪外交」はサタンの欺瞞であることをしかと知っていなければならない。「大争闘下巻」の第 35 章は原文では「法王教のねら

い」である。クリスチャンでありながら、愛がないというだろうか。ワルデンセス、プロテスタントは法王教を嫌うように幼いころから教えられたのである。イエスは「あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた」のである(ヘブル 1:9)。「もし心霊術の真の性質についてほかの証拠がないとしても、霊というものが義と罪とを区別せず、キリストの最も気高く純潔な使徒たちとサタンの最も墮落したしもべたちとを区別することをしないということだけで、キリスト者たちにとっては十分であろう」(大争闘下 311)。

「我々は『罪の人』を暴露するように召されているのである」(EV233, TM118)。

「第三天使の使命も、このようにして宣布される。それが非常な力で伝えられる時が来るならば、主は謙遜な器を通して働かれ、主の奉仕に献身した人々の心を導かれる。働き人は、学歴ではなくて、聖霊を注がれることによって資格を与えられる。信仰と祈りの人は、聖なる熱意に燃えて出て行き、神から与えられる言葉を宣言せざるをえなくなる。バビロンの罪は暴露される」(大争闘下 376)。

## セブンスデー・アドベンチストに変化が来る

「魂の敵は、セブンスデー・アドベンチストの間で大改革が起こるべきであるという推測を持ち込もうとしてきた。この改革は我々の信仰の柱としてきた教理を放棄し、組織の再編成をすることであるというものであった。このようなことが起こったら、その結果はどうなることであろう？ 神の知恵によって残りの教会に与えられた真理の原則が放棄されるであろう。我々の宗教は変えられるであろう。過去 50 年間(1903 年に書かれた)にわたり、働きを支えてきた基本的原則が誤りと見なされるであろう。新しい組織が確立されるようになるであろう。新しい種類の書物が書かれるようになるであろう。主知主義 (intellectual philosophy—知識偏重主義)の体制がとり入れられるようになるであろう。この体制をつくる者たちは都会へ行き、めざましい働きをするであろう。もちろん安息日は軽視され、それを制定された神も軽視されるであろう。その新しい運動を阻止しようとするものはだかるものは、どんなことも許されないであろう。美德は悪徳に勝ると指導者は説くが、神が取り除かれ、彼らは神ぬきの何の価値もない人間の力に頼るようになるであろう。彼らの基礎は砂の上に据えられ、嵐が吹き荒れると、建物はひとたまりもなく倒壊するであろう」(ISM 204,205)。

## その他のローマへの接近の証拠：

- ◆ 1977年5月18日に、SDA 宗教自由部の B・B・ビーチ博士は法王パウロ六世に金メダルを贈呈した。ビーチ博士は「公式の代表者として法王に謁見することは、SDA 歴史上初めてのことである」と言った。
- ◆ 1977年8月11日に、アンドリュース大学教授、サムエル・バキオキ博士が「安息日から日曜日へ」という論文のゆえに、ローマの最高学府から金メダル、最高勲章を受ける。その本はグレゴリアン大学院院長、ヴィンセンゾ・モナチノ、S.J. の推薦の言葉を載せている。S.J. は Society of Jesuit, イエズス会の略字である。
- ◆ 1995年、12月16日、コロラド、デンバーの SDA ポーター・メモリアル病院がカトリックの病院と提携した。
- ◆ 1990年世界総会、バチカンにオブザーバーを送るように正式要請カトリック側の証言：



FRONT



BACK

7月29日、カトリック・ウィークリー誌

「セブンスデー・アドベンチスト教会の主流は、反カトリックから立場を変えた。カトリック教会と協調するという新しい立場は、セブンスデー・アドベンチスト教会からバチカンへ世界総会に公式のオブザーバーを送るように要請したことにあらわされた」

「アーカンソー・カトリック」誌

「アドベンチスト、反カトリック冊子を配布—インディアナポリス(CNS)—7月6～14日間にわたってもたれる、2000人の代議員の集まる、55回目の教団世界総会の間、テネシーのセブンスデー・アドベンチストの分派は、インディアナポリスの家々に知り得ない数の反カトリックの小冊子を配布した」

「教団のスポークスマン、シャリー・バートンは、インディアナポリス『STAR』新聞にその小冊子は、がらくた」とであると伝えた。その小冊子『預言されたアメリカ』は、カトリックを異教の宗教だと呼んでいる。総会に出席していたあるアドベンチストは、反カトリシズムは伝統的なアドベンチストの教理の重要な部分であるのでバートンの発言は取り消すべきだと主張した。

「『クライテリオン(Criterion)』—インディアナポリス管区新聞(カトリックの)の編集長、ジョセフ・フィンク氏は『セブンスデー・アドベンチストは18から19世紀にかけて、他のプロテスタントと同じように反カトリシズムの歴史がある。しかし、教会の主流は反カトリシズムから移り変わった。たとえば、セブンスデー・アドベンチストからバチカンに総会に正式なオブザーバーを送るようとの招待が発せられたことによって、カトリック教会と協力体勢の新しい立場をとっていることがあらわされている』

「インディアナポリス管区の教会一致運動指導者である、トーマス・J・マーフィー神父は、バチカン側からのオブザーバーとして出席し、7月10日、総会で話した」。

「教団のニュース・ディレクターのハーバード・フォードは、インディアナポリス『スター』誌に『歴史的な反カトリシズム信仰に執着するアドベンチストは、北アメリカの750,000人の教会員の中、たった1,000人くらいのものである』と語った」。

◆ パシフィック・ユニオン・レコーダー誌

「私はアドベンチズムの絶え間ないカトリック攻撃、非難に疲れ果ててしまった。カトリック教会は中世時代のそれとは同じではないし、1900年代のそれとは同じではなくなった。セブンスデー・アドベンチスト教会も100年前とは同じではないのだ」。

◆ 安息日学校教課、2000年2期、p98

「セブンスデー・アドベンチストが変質したのではなく、教会は世界宣教に向けて時代とともに成長した、これからも成長を続けると理解して下さい」

「こうした動機は、友愛という名目の下に隠されていたため、民の守護に当たる者たちでさえそれに気付かなかった」(あけほの上66)。

「危機が速やかに近づきつつある。急速に膨れ上がる数字は神の刑罰の訪れる時がすぐ来ようとしていることを示している。神は罰するのを嫌われるが、それでも罰せられるのである。そして、速やかにそうなる。光の中に歩む者は近づく危機のしるしを見るであろう。しかし、彼らは来るべき滅亡に無関心で神は刑罰の訪れの時にご自分の民を保護なさるであろうと思いこんで、自らを慰め、黙ってじっとしてはならない。彼らは強い信仰をもって神に助けを求めつつ、他人を

救うために熱心に働くことが彼らの義務であることを自覚しなければならない。

『義人の祈りは大いに力があり、効果のあるものである』。

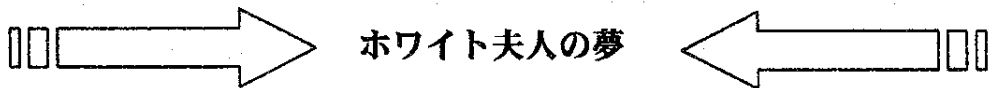
信心のパン種は全く光の力を失ってはいない。教会の危機と沈下が最高の時、光に立っている小さな仲間たちは地に行われている憎むべき事柄に対して嘆き悲しむであろう。しかし、教会員が世の方法に従っているので、彼らの祈りは特に教会のためにたちのぼるであろう」(5T 209)。

教会はラオデキヤ状態であるが、預言された最後の教会である確信を聖書と証の書から得る時である。大きな震いがやってきて教会は純潔にされる(大争闘下 378)。この教会はキリストの花嫁である。証の書のどこにも背教する教会から出よという言葉は私は見いだせない。

背教の暗雲が重くたちこめることは、大雨(後の雨)の降り注がれる時が近いことを意味する。

初代文集 437 頁からの震いの章をぜひ、ぜひ読んでいただきたい。「大きな変化」が我々の教会にやって来る。力と栄光に輝く日がもうすぐやって来る。

再臨信徒の皆様、上を見上げよう。憐れみ深い我らの大祭司を仰ごう。希望と確信と力を頂こう。



(ホワイト夫人が夫とバトルクリークへの旅行の途中、あるところで集会をしたその夜)

「わたしは、その夜夢でバトルクリークにいた。窓ガラスから外をながめていると、その家に向かって二人ずつ隊列を組んで行進してくる一団を見た。彼らはいかめしい顔をして断固とした態度をしていた。わたしのよく知っている人たちであつたので、歓迎しようとして客間のドアを開けようと思った。しかし、もう一度見たほうがいいという思いがよぎった。

光景は変わっていた。その一団はカトリックの行進となっていた。ある者は手に十字架を持ち、ある者はアシの莖を持っていた。だんだん近づいてくるや否やアシの莖を持っている者らが家を取り囲んで「追放、財産没収だ。財産を押収せよ。この者らは我らの聖職位に逆らってきた」と言った。恐怖がわたしを襲った。そ



してわたしは北の方のドアを開け、家からとび出た。するとその一団に取り囲まれた。そのある者たちはわたしの知っている人たちであった。しかし、裏切り者とされる恐れで一言もしゃべらなかった。わたしはどこを見ても執拗に追いかける目に触れずに、のがれて泣き祈る場所を探そうとした。『一体どういうことなのでしょう。わたしが何を言ったというのでしょうか、何をしたというのでしょうか』と繰り返し独り言を言った。

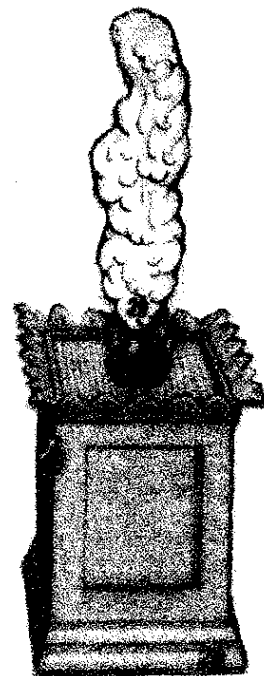
我々の財産が没収されるのを見てわたしはあらん限り泣いて祈った。わたしは取り囲んでいる者たちの目に同情と憐れみを読もうとした。他人に気づかれることを恐れないならば、わたしに語りかけ、慰めてくれるだろうと思われる数人の者の顔つきを見た。わたしはもう一度その群から逃れようと試みたが、見られていることが分かったので自分の思いを押さえた。わたしは『一体わたしが何を言い、何をしたというのだろう』と言って大声を上げて泣き出した。わたしと一緒にの部屋に寝ていた夫がわたしの泣き叫ぶ声を聞いてわたしを起こした。わたしの枕は涙に濡れていた。わたしは意気消沈していた（1T 578.1）。

「教会と法王教の距離を縮めるのは背教する教会である」（ST2-19,1894）。

「我々には外からよりも、内部からの方がはるかに恐れるものがある」（1SM122）。

信仰によって着せられるキリストの功績によって、キリストの義によって、我々はクリスチャン品性の完成に到達しなければならない。 5T744。

彼らは、悪の一つ一つにうち勝つために、またキリストによって着せられる義によって正しい品性を完成するために、聖なる努力を払っていません。青年 15。



---

---

(次の記事は 1960 年代に牧羊に掲載されたものであるが、牧師ばかりでなく、信徒にもぜひ読んでもらいたいし、時期にかなったものであると思い、あえて紹介することにした。)

## ローマ・カトリックは変わったか？

日本三育学院 神学部 N・R・ガーレー

本号の「牧羊」は、カトリシズムという主題を特集している。であるから、その教会の最近の歴史、即ち革新の歴史のうちで最も重要な領域を概観しながら、終末論の研究を続けるのは適当なことであろう。カトリック教会は変貌しているのであろうか。何の目的で変貌しているのだろうか。これらの変貌、また、将来どう解釈すべきか、というのが我々の検討しようとする領域である。

### 革新の事実

革新という言葉は、ほぼカトリック教会と同義になりつつある言葉である。ロズマリー・ルーザー女史は、プロテスタントの「クリスチャン・センチュリー」誌で、以下のように述べている。

「ヨハネス23世の在任以来、ローマ教会内の革新と改革について語ったり、ローマ教会が改革の計画に乗り出したのを見るのが可能になり、またそれを話すことさえも普通になった。第二回バチカン会議は、教会再一致は、教会内部からの革新が先立たなければならないし、それに基いているべきであるという法王ヨハネスの訓令に従って取り上げられ、革新と改革の会議として開かれた。」(1)

彼女と同じように考えているのは、その雑誌の副編集長、マーチン・E・マーチイで彼は「ローマは今まで変貌してきたが、現在も変貌しつつある」(2)と肯定した。セブンスデー・アドベンチストの北ヨーロッパ支部教育部部長、B・B・ビーチ博士は第二回バチカン会議の多くの総会に出席した人であるが、「ある種の聖書的改心がローマ・カトリック教会内に広がっていることは疑えない」(3)と書いている。1960年にさかのぼってさえ、カール・バルトのような一流の神学者も、「今日のローマ・カトリック教会には既に内部の革新が起こっている」(4)と述べていた。

プロテスタントのみならず、カトリックも教会が革新に着手していると信じている。インディアナ州、聖メインラド神学校(ベネディクト会)の神学部教授、キエラン・コンレイは、「確かに現代のキリスト教における最もさわやかな発展は広範な自己批判

とローマ・カトリック教会に見られる改心の欲求である」(5)と確言した。ペドロ・アルプ（バスクの宣教師）という元在日カトリック宣教師は1965年・6月にイエズス会の指導者になるべく選出された時、記者会見で彼の方針を予告した。このことについて、「彼はイエズス会を教会内の革新の上に固く据えた」(6)と記録されている。

## 革新とプロテスタント化

我々はプロテスタントばかりでなく、カトリックの代表者もカトリック教会内に本当の革新が起こっているのを肯定しているのを認めるが、ある者はこれを教会内のプロテスタント化と同等視さえしている。たとえば、もとカトリック教徒であった、ロナルド・ゲーツは、「革新のための神学」というカール・ラーナーの著書を論評する書評に次のように書いた。

「ローマ・カトリックの教会の最高権威者たちは、ほんの2、3年前は思いもよらなかった自由化—我々ローマ・カトリック教会から出てきたプロテスタントにとっては特に目立つ自由化—への願いを経験した。・・・改革の原理はプロテスタント主義に非常に重要であるために、我々は一般的には、ローマ・カトリックの動向、また、特にラーナー神父の著書に見られるカトリシズムのあの態度にプロテスタント化を見たくなる。われわれが、それは不完全であると考えてみても、ローマの思想における新しい姿勢が宗教改革以来の教会合同論争に最も固い基盤を与えていることは疑いもない事実である」(7)。

ポーランドのルーテル教会議長兼世界ルーテル連盟の副会長である、アンドリュウ・ワントル主教はこのように述べた。「今のローマ・カトリックはある種の革新の中を通っているということを忘れてはならない。あるカトリック教徒は、宗教改革のうちのある問題を引き継いでいる」(8)。

アメリカのサイエンス誌に次のような興味ある引用文が載っている。

「1963年3月11日号ニュース・ウィーク誌は次のような報告をした。

ドイツやオランダにいるローマ・カトリックの聖職者たちは3月にミュンヘンで行われた会議の再会を検討する協議会で『ローマのアルフレドウ・オタビア二枢機卿に導かれる教会の保守派に対抗する陣営として立つ』ことを決定した。重大な歴史の変化をもたらすペテロの一声が今出されようとしている。

新年号のリーダーズ・ダイジェストは第二回バチカン会議は歴史上、おそらく「最も意義ある宗教会議」であろうと特徴づけた。

タイム誌は、それをキリスト教における改革の火ぶたと語り、四世紀にわたってクリスチャンの俠信を消散させてしまった分裂の終わりであると約束している。

プロテスタントのコラムニストであるローバート・マッカフィー・ブラウン博士はカトリックの隔週誌、コモンウィールの中で「宗教改革以来、キリスト教界を荒らした400年の冷戦は終わろうとしている」と似かよった論評をした。

フランシス・x・マーフィ神父は3月9日号の「アメリカ」誌で会議を賛え、次のような言葉で閉じた。「教会は今や新たな方向に動いている。こうするために法王ヨハネスは必ずや時の人（タイム誌は彼をこう賛えた）だけでなく、千年期の法王として歴史に伝えられるであろう」(9)。

新しい方向に進む教会、変貌の過程、宗教改革以来戦われた冷戦の終局—すべてはカトリック教会がキリスト教陣営のプロテスタント側に動いていることをほのめかしている。あるカトリック教会の平信徒が同じことを考えていることを例示するような愉快的出来事がダラス市で起こった。即ち、「老婦人はバチカン会議について読んだのちに司祭にこう言った。『神父さま、世はすさまじく変わっています。ミサ（聖祭）は英語で祝われ、司祭は説教するように求められています。私はカトリック教徒として生まれたのに、プロテスタントとして死ぬようです』(10)。

この「革新」は教会のプロテスタント化と同等視されるだろうか。カトリック教会は、本当にプロテスタントらしくなっているだろうか。革新の例をいくつか拾ってみよう。

## 革新の例

プロテスタントの雑誌、クリスチャン・センチュリー誌は次のような例を列挙した。

1. バチカン会議の総会に女性の傍聴者がいるのは革新的であった。
2. 東方教会の司祭をのぞいて成人に達した「結婚した男性」を助祭職に任命するという原則を司教が承認したことは、教会が900年に及んで独身制を要求したことに対する最初の革新になるであろう。
3. 16世紀のトリエント前会議の決定をひるがえして、プロテスタントと同様にカトリックも教会の分裂に責任があることを公言する教会合同条項に根本的に同意した。クリスチャン・センチュリーの筆者たちは、これらのことは「ローマ・カトリックとプロ

テスタント間の疑惑と頑迷のふちが狭り続けて、ついにはこのみぞが全く埋まってしまふという希望」を強めると言明した(11)

セントルイスで 1964 年の 6 月、ローマ・カトリック教徒と監督教会の牧師が合同で結婚式を執り行い、カトリックの花婿が監督教会の花嫁と結婚した。この挙式は両側の指導者からの祝福を受けて行われた(12)。

ミサは今、過去何百年も行われてきたラテン語の代わりにその国の母国語であることができると言われている。この目的は二重である。即ち、「儀式に活気を与えてその奉仕を人々に密接にさせることと、プロテスタント教会の「分かれた兄弟たち」とのより密接なきずなを取り戻すことである」(13)。

フランス国民改革派教会の議長、ピエール・プルゲは彼の国の教会に起こった変化のうち他の場所でも確かに起こっているような変化のいくつかを指摘して、こう語った。「近年、礼典が著しく簡素化され、説教が最も重要な位置を占め、フランス語を使用し、賛美歌を歌うなど、フランス内のカトリックの礼典は新しい方法を用いている。彼らの教会では聖書が背丈を伸ばした」(14)。

ミカエル・ド・ラ・ペトエーレによる「ローマ・カトリックへの反発」という自己批判の書物がついに先頃、トーマ・ロバーツ大司教の承認で公表された。これについて、クリスチャンセンチュリーは「ヨハネス時代前だったらそのような本は発行前に司教たちによって握りつぶされたであろう」(15)とのべた。この本は事実上自分たちの教会のある面や、その実践に洞察力のある見方をした 7 人の著名なカトリック教徒によって著された。「このようは本は 5 年前は考えもつかなかった。明らかかなことはどれほど速やかに教会合同革新が進行しているかである」(16)と、ロバート・マックフィー・ブラウンは書いている。

変貌のもう一つの例は、第 13 項が第 2 回バチカン会議に提示されたときに明らかになったものであるが、この条項は教会が「外部の世界」に順応するものにならなければならないことをうたったものである。ロズマリー・ホートンがその著書「カトリックへの反発」(ロンドン 1964 年、130 頁)で語ったように「人類の進歩というすべての大運動は(カトリック)教会の感化が及ぶ領域以外のみならず、狂乱する反対の歯の中でも(始まり)続いた」。天文学、物理学、医学のような領域は暗黒時代中、教会と勇敢な学者たちの間の戦場であった。

この事は、バートランド・ラッセルが「宗教と科学」(1953 年、ニューヨーク・ヘンリー・ホルト社刊)によく説明している。しかし、このような無知の過去と対照的に

カトリック教会は、今やその第 13 項を通じて変貌している。「第 13 項で教会は、現状維持という牢獄をつき破って歴史的な発展という絶え間なく変転する現状に、ふだんの順応をするという、より危険でより意義ある行動に思い切って入ろうとしている。言い換えればローマは今、過去から出て現在に生きたいと熱望しているのである」(17)

このように例をあげればいとまがない。数世紀にわたって実践されてきた習慣は変貌し... そのうちの多く... また内部のすべては、2,3 年という驚異的な短期間に変貌するであろう。

(筆者注：バチカン第二公会議、1965 年から 35 年も経った今日どれほどの変貌を我々は見ているだろうか。ある人は、カトリック教会は今までミサを祭壇に向けて行っていたが、今日は聴衆にむかって行っているという。たしかにそのような変化はあるであろう。しかし、外見の変化にだまされてはならない。新世界秩序構築は目前に迫っている。)

しかし、これらの例は、カトリック教会のプロテスタント化を意味するであろうか、という問いに答えなければならない。おそらくこれに対する最善の解答は、イタリア・プロテスタント教会連盟会長マリオ・スパフィ博士の言葉の中に与えられているであろう。「今まで、教理的な革新は現れたことがなく、主として戦略上の変更がなされただけである。にもかかわらず戦略上の変更から教理的な変更へ滑り落ちる可能性がある。(編者注：「ローマ教会は決して変わらないと言うことがこの教会の自慢の種であること忘れてはならない」(大争闘下 340)。

ローマ・カトリック教会の中には何かが動いているが、今起きていることは教会の教理を動かしていない。あるイタリアの新教徒たちは会議の初めに当たって希望を抱いたが、これらの希望は、今やほとんど裏切られた」。更に進んだ質問、即ち「あなたの最後の声明からして会議の消極的な面をあげてもらえないか」という質問がなされた。彼は答えていった。「... 三つの総会の後、カトリック教会は組織的な構造のある面を革新し、ある「ゆとり」を許したが、それでもなお教理の装備には本格的な変更をしないであろう。司祭たちは前より自由に個人的な意見をはけるようになって

いる。  
毎年、10 人から 15 人のカトリックの司祭が母教会を去りたいと希望して、わたしの事務所に来たものだったが会議の発表があった後、約 2 年というもの彼らは全くと言って良いほど来るのをやめてしまった。彼らは教会内の革新や思い切った変化を希望していたのだった。彼らはヨハネス 23 世の時以来、変化を希望していた。ところ

が最近になって彼らは再び来始めるようになったが、これは真の革新への希望を放棄したことの兆候であるように思える」(18)。

プロテスタント化の革新には教理の変更がなければならないが、それがみじんもないことは歴然としている。

(編者注：「ローマ教会は決して変わらないと言うことがこの教会の自慢の種であること忘れてはならない」(大争闘下 340)。

### 何のための革新か

こう考えてくると何のための革新か、という次の質問にぶつつかる。法王ヨハネス自身は、「教会再一致は内部の教会革新が先立ち、その上に基づかなければならない」と述べて、これについて非常にはっきりとした見解を示した。

(編者注：今日もこの教会は、プロテスタントの聖書を焼き捨てていながら、今になって聖書を共同で翻訳するとか、宗教改革の礎であった信仰による義認も容認してプロテスタントのそれと一致の共同声明をするとか、信教の自由を主張するとか発言しているが、この「獣」は二枚舌を使う、欺瞞であることを覚えていなければならない。「この教会が何よりも望むものは、有利な立場である」「自分が手をくたす時が来たら自分自身の目的を押し進める」のである(大争闘下 341)。「信教の自由をがまんしているにすぎない」(大争闘下 320)。

また、キリスト教一致のためのバチカン事務局、ウイルブランズ司教も、1964年12月1日のインドにおける聖体大会で、「プロテスタント教会がわれわれと一層良く共存できるようになるために、法王は教会の内部の革新を押し進めている」(19)と述べた。革新とは、黙示録 13:3 を成就するような再一致運動で、ローマの群れに連れ戻すような感化を与えるために、プロテスタントに対しより魅力的にするために、少しばかり「近代化」することである。真に、非常に確かな方法で、カトリックの劇的な革新は世界中の多くの者を「おそれてその獣に従」わせるであろう。

### 本当の変化はどこで起こっているか

カトリックに関する限り、教会内には変化が起こっているにしても、根本的な変化ではなく、プロテスタント化はしていないのである。プロテスタントの陣営はどうであろうか。プロテスタント教会は、ローマの願望をみだし、実質的な方法でカトリックに向かっているであろうか。

第一回の記事で、E・G・ホワイトの次のような言葉を引用した。

「カトリック教会は今日存在しているプロテスタントによく類似している。それはプロテスタントが宗教改革者の時代以来、ひどく墮落したからである。」(20)。

おそらく大争闘のこの注解を最もよく例示するものの一つは、ほとんどの教会でなされている宗教改革記念祭であろう。プロテスタントのクリスチャン・センチュリー

誌は、次のように記録している。「毎年、伝統的なプロテスタントの宗教改革記念日は著しく下火になって、『父祖の信仰』 Faith of Our Fathers、ローマ・カトリック賛美歌)に歌われる信仰の遺産と『神はわがやぐら』とは大差なくなっている』 シカゴ神学院の学長ハワード・スコマーによると、次の段階は、プロテスタントーカトリックー東方教会合同の革新日が宗教改革記念日にとってかわることになるだろう。スコマーは言った。「プロテスタントが 16 世紀の宗教改革は失敗であったと速やかに認めるべき時が来ている。もし、いかなる意味にもあれ教会が一つであれば、ただ一つの宗教改革しかないはずである。16 世紀に始まって失敗したことは、20 世紀に革新され、ひいては教会全体の革新に至らなければならない」(21)。

カトリック教会のダレス神父(ジョン・フォスター・ダレスの子息)は、ルターの最深部にある希望は、ローマとの一致であったと表明した。ほとんどのプロテスタント教徒が宗教改革記念日を祝っている方法は、彼がこれを信じ、ローマと一致を望んでいることを示している。なぜならば、少なくとも、ルターが今日、特に宗教改革記念日に、われわれに立ち戻ってきたとしたら、プロテスタントのうちの多くを認めはしないであろうからである。

## 将来

将来はどうなるであろうか。この種の革新がもたらす結果は何であろうか。ホワイト夫人は解答として、将来を暗黒時代の迫害と関連づけている。

「これらカトリックの記録は真の安息日とその擁護者たちに対するローマ教会の敵意と、この教会がつくり上げた制度に尊敬を払わせるローマ教会の手段をはっきりあらわしている。神のみことばには、ローマ・カトリックとプロテスタントが日曜日を高めるために協力する時、これらの光景が繰り返されることが教えられている」(23)。

以上のようにして、プロテスタントはカトリックと手を組み、カトリックが考案した礼拝の日を強要するようになるであろう。今日、実際に起こっているのは、プロテスタントのローマ復帰運動であって、カトリックの変貌は、墮落したプロテスタントの復帰を最も魅力あるものにするための表面的な革新にしかすぎない。キリスト教界の注意を捕らえているが、カトリックの中核一日曜日礼拝を強要するであろうという将来への預言は変わらないままであるということに注意することが重要である。エキュメニズムの法王ヨハネスは、1961 年 5 月 15 日に発表した最初の回勅でこう語った。



「教会は常に『安息日を覚えてこれを聖とせよ』という十戒の第四条を厳格に遵守すべきことを要求してきた... われわれはたとえ、露骨な不敬はないにしても、この聖なる律法に無頓着であることを認めて嘆かなければならない... 神の聖名において... われわれは、官庁、雇用者、労働者、すべての者に神とその教会が持つ戒めを厳守すべく呼びかける」(24)。

(编者注:カトリックは神の名、神の十戒にかけて自分たちの十戒を厳守すべしと命じていることは恐るべきことではないだろうか。)

この声明は、きわめてはっきりしている。ローマはこの肝心の領域で変わっていないのである。宗教に重要な関連ある領域でも、第二回バチカン会議が遅ればせながら、この主題についての文書を提示したことはよく知られている。

リバティ誌を見ると、公文書に関して次のような興味深い評価がなされているのに気付く。「これらすべてから、第四会期に呈示された書類は、プロテスタント的な意味における、あるいは民主主義的な意味における宗教自由の宣言でないことが分かる。

それは、一方では『人類を救う責任を果たすのに必要なだけの行動に自由』をローマ・カトリック教会のために主張するのに用いることができると同時に、他方では教会がカトリシズムの優勢ないかなる国家に対しても、カトリックの信仰を保つために国民に課されるべき宣言を定めることができるとする柔軟な解釈の可能な宗教的寛容の宣言に他ならない。

換言すると、民主国家アメリカ、イギリスにおいても、ローマ・カトリック教会の完全な権利を確保するのにそれが用いられ、一方カトリシズムが国家の公式の宗教となっているスペインのような諸国においては、教会はいかなる程度の不寛容をも課することがゆるされるのである」(25)。

この領域にもローマは変わっておらず、スペインに関する限り、この国での最近の事件は、前述の言葉が正しいことを示している。なぜならば、B・B・ビーチがその状態を描写してこう記しているからである。「今まで1年以上もスペイン政府と国会とは、プロテスタントに合法的な地位を与え、宗教の自由を増大させるために立案された法律案について論じてきた。他方、『誤謬』は権利を持たず、宗教的な一致は宗教の自由よりも重要であると思っているために、非カトリック教徒に宗教自由を授けてはならないと、狂信的な反対をしているローマ・カトリックの高官の中にも有力な派閥がある」(26)。

将来のための舞台はよく整っている—カトリック教会の中に革新が起こっている—が、根本的な変化はない。このような最近の事件は、ホワイト夫人の次のような言葉

と一致している。「また、ローマ教会は決して変わらないということが、この教会の自慢の種であることを忘れてはならない。グレゴリー七世やインノセント三世の主義は、今なおローマ・カトリック教の主義である。そしてもしひとたび権威を持つならば、過去の場合と同じ勢力をもって、その主義を行動に移すであろう」(27)。

### 革新の真の事実

カトリック教会で起こっている革新の真の事実については、黙示録 13:3 に語られている。1798 年に失った権力と威信の更新である。われわれが「各時代の争闘」で知っているように、最後に世に対してローマが変わらなかったことを示すのはこれである。「ローマ教会は黙々としてその勢力をのぼしつつある。その教えは議会に、教会にまた、人の心に影響を及ぼしている。法王制は堂々たる大建造物を築き上げるがその奥まった部屋では昔の迫害が繰り返されるであろう」(28)。今から少し考えてみたいのは、勢力と影響力のこのような革新についてである。われわれは 1960 年代に生存しているが、1961 年から 1965 年までのほんの短期間に教会はその失った権力と影響力を回復するのに長足の進歩をとげた。

1. 1960 年カクタベリー大僧正が、法王に会いに来た。... 400 年間で最初である。
2. 1964 年 1 月、法王はギリシャ正教の指導者と会見するためにパレスチナに行った。... 400 年間で最初である。
3. 1964 年 12 月。法王はインドへ行った。... 異教世界へ手をさしのべた。
4. 1965 年 2 月、国連では世界の指導者たちが「地上の平和」という法王パウロ六世の同文通達に基づく平和を論じた。
5. 1965 年 10 月、法王パウロは、世界平和を訴えるために国連に行った。
6. 1965 年 12 月 8 日、3 年のバチカン会議は終わり、教会がこれまでに催した最大の会合であると宣せられた。その中で、無神論に接触する部門が組織された。
7. 1965 年 12 月、法王はベトナム戦争の重要な仲裁者になった。

上に挙げた七つの点に簡略ながら教会の広がりつつある影響力と威信が描かれている。ギリシャ正教、プロテスタント、非キリスト教（プロテスタントのみならず、非キリスト教徒との接触になったインド旅行の他に立正佼正会の指導者、庭野日敬氏が招待されて出席した第二バチカン会議が思い出される）、そして無神論者にさえも達するために、教会がローマから出てくるのが見られる。世のあらゆる分裂に、ほんの 2、3 年間に手を伸ばしたおかげで届いてしまった。

その上、この恐怖の時代に、各国の指導者達は不可避と見える核爆発から脱出する道を探しているが、その道がいかに宗教によるように見えている。カトリック教会は世界的で、最古の組織をもつ教会であるが故に、その役割を果たしうると印象的な主張をしてきた。幾世紀もの由緒ある定例文の形式から離れて、その平和勅書を「カトリック教徒のみならず、善意ある全人類」にあてた(29)。

また、20カ国から来た2千人の代議員はこれを研究するためにニューヨークに集まったが、その中にはその国々の最高指導者も混じっていた。そして、法王パウロが演説のために国連に赴いた時の印象は、プロテスタントのクリスチャン・センチュリーに次のように記してある。

「法王パウロ六世が国連総会で語るのを聞いた者、のちに代議員と語った者は、世界の外交界が法王を戦争、平和、また諸国間の関係などの問題について、世界キリスト教界の代表者として見なしているということを疑うことができないであろう」

米国の合同長老教会の指導者、ブレイク博士は、「法王がキリスト教のすべて、人類のすべてを代表して平和を最も雄弁に訴えたことを喜んで認めた...『法王パウロは、自分の指導権と教会の指導権を主張したが、ほとんどの非カトリック教会が彼の平和への訴えを受け入れ、彼はわたしに語っているのだということのできる方法でそうしたのであった』(30)。世界の外交界とキリスト教界がこうして法王のなかに代弁者、代表者—まさしく革新の劇的な確証である—昔の威信と更新を認めた。

法王は、国連での演説の終わりで、こう語った。

「もう一つの言葉を結びに言わせてほしい。あなたたちが築き上げている建造物は、単に物質的な地上の土台の上のみ安んじるものではない。何故ならば、それだけならそれは砂の上に立てられた家にすぎないからである。それは何よりも自分自身の良心に基づいている。個人的な改変、内なる革新のために、『回心すべき』時になっている」(31)。

然り、まさしくその通りである。これこそ現代のカトリック教徒とプロテスタント教徒のほんとうの必要—内なる革新—である。しかし、どちらの陣営も経験しているのは、この革新ではない。彼らは実際に砂の上に立てているのであって、黙示録18章に預言されているとおり、救い主のたとえ話の中の砂の上に立てられた家とそっくり、ついには倒れてしまうであろう」(32)。

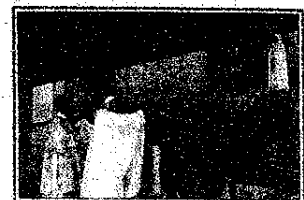
◇ バチカンのポリグロット出版社から発行されたロンドンのゼームス・フォレストール神父著「司祭はどこにいるか」によると、カトリック教では世界的に司祭が不足し、とくにアジア、アフリカ、ラテンアメリカでは緊急に司祭増加が必要で『大胆な措置を執らねばならぬ』と警告している。

ローマ・カトリック教会では信徒 800 名に対して司祭 1 名を理想としているが、1960 年に立てた信徒 1254 名に 1 名という比も守られず早急に 30157 の司祭の叙階が必要であるという。

Footnotes:

- |   |   |
|---|---|
| (1) Christian Century, Sept.22,1965,p.1152            | (25) Liberty, Nov—Dec 1965, p10   |
| (2) Christian Century Dec.9,1964,p.1520               | (26) Signs(USA), Nov 1965, P.18,19  |
| (3) Signs of the Times(Australian),July 1,1965,p.8,10 | (27) 大争闘下 340,341   |
| (4) SDA Bible Students Source Book, p.375             | (28) 同  |
| (5) Christian Century, April 28, 1965, p.523          | (29) Review and Herald, April 1, 1965, p.1,8  |
| (6) Review and Herald, July 22,1965,p.13              | (30) Christian Century, Oct 20, 1965 p.1278s—9  |
| (7) Christian Century, Nov 10,1965,p.1383             | (31) The Pope's Journey to the United States,(book by the New York Times), 1965,p.113 |
| (8) These Times, March, 1965,p.6,7                    | (32) マタイ 7:26,27  |
| (9) Signs(USA),Nov.1963,p.7                           |   |
| (10) Christian Century, Dec 16,1964,p.1568            |   |
| (11) Christian Century, Oct.21,1964,p.1293            |   |
| (12) Christian Century, Oct.28,1964,p.1325            |   |
| (13)These Times, March, 1965,p.32                     |   |
| (14)Sings(USA), Aug 1964, p.22                        |   |
| (15)Christian Century, Decx 9, 1964,p.1540            |   |
| (16)Christian Century, Feb.24,1965.,p.245             |   |
| (17)Review and Herald, Feb 18, 1965,p.3               |   |
| (18)These Times, Nov 1965, p.10,11                    |   |
| (19)These Times, March, 1963, p. 33                   |   |
| (20)大争闘下 328  |   |
| (21) Christian Century, Nov 11,1964,p.1389            |   |
| (22) Review and Herald, April 22, 1965, p.11          |   |
| (23) 大争闘下 337   |   |
| (24) Review and Herald , April 1, 1965 p10            |   |

# ALL ROADS LEAD TO ROME?



THE ECUMENICAL MOVEMENT  
by

すべての道はローマに通ず

みんなで見張ろう

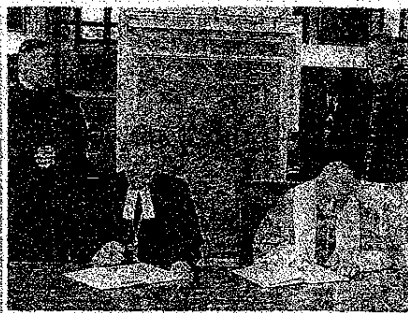
「サインズ・オブ・ザ・タイムズ」時のしるし!

(新聞の切り抜きを送って下さった皆様に感謝します)

NEELY カトリック新聞 1996年12月4日

北朝鮮の金ジョンイル総書記は、法王に会えるよう韓国大統領金デジュン大統領(カトリック)に頼んだと言われている。

# 五百年近い論争に終止



カトリックとルーテル派の共同宣言が、五百年にわたる論争に終止符を打つ。両派の共同宣言は、両派の神学上の相違点を認め、互いの信仰を尊重し、共に歩む道を模索する。これは、両派の歴史的な対立を乗り越え、新たな関係の構築に向けた重要な一歩である。

4/25/99

## 「義認」をめぐる論争に幕

カトリックとルーテル派が共同宣言



### 進む教会一致運動

カトリックとルーテル派の共同宣言は、両派の神学上の相違点を認め、互いの信仰を尊重し、共に歩む道を模索する。これは、両派の歴史的な対立を乗り越え、新たな関係の構築に向けた重要な一歩である。

カトリックとルーテル派の共同宣言は、両派の神学上の相違点を認め、互いの信仰を尊重し、共に歩む道を模索する。これは、両派の歴史的な対立を乗り越え、新たな関係の構築に向けた重要な一歩である。

### 北朝鮮対応で法王と会談



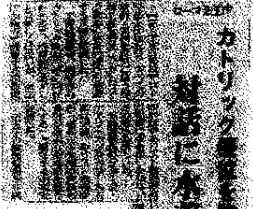
北朝鮮対応で法王と会談  
4日、パチカンでヨハネ・パウロ2世(右)に贈り物の陶製の鉢を指し示す金大中大統領(左)と会談する。

4日、パチカンでヨハネ・パウロ2世(右)に贈り物の陶製の鉢を指し示す金大中大統領(左)と会談する。



### ローマ法王「十戒の山」に一步

ローマ法王は、十戒の山に一步を踏み出した。これは、両派の歴史的な対立を乗り越え、新たな関係の構築に向けた重要な一歩である。



### カトリックとルーテル派の共同宣言

カトリックとルーテル派の共同宣言は、両派の神学上の相違点を認め、互いの信仰を尊重し、共に歩む道を模索する。これは、両派の歴史的な対立を乗り越え、新たな関係の構築に向けた重要な一歩である。



### パレスチナで法王がミサ

## 脳神経は神が人間と交わる唯一の媒介

「全組織に情報を伝える脳神経は、天が人間と交わり、人の内なる生活を感化する唯一の媒介である。神経組織の電気の流れの循環を妨げるものは何であっても活力を弱め、その結果は精神の感受性を麻痺させる」 2 T347。

「頭脳は体、全神経の力、知的行動の首府である。頭脳から発している神経が身体をコントロールしている。脳神経によって知的印象が電話回線のように身体のすべての神経に伝えられる。そしてすべての組織の各部分の行動を支配している。すべての器官は頭脳から受ける情報によって支配されている」 3 T 6 9、HL193

### 生ける神の宮

「人体の不思議—わたしたちは神の作品です。わたしたちは、「恐るべく、くすしく造られたとみ言葉は述べています。神はわたしたちの心(mind—精神)のためにこの生きた住居を備えてくださいました。それは「[不思議に] つづり合わされ」、主ご自身が聖霊の住まわれる所として準備なされた宮です。心(mind)は人間全体を支配します。わたしたちの行動は、善であれ悪であれ、みな心に源を持っています。神を拝し、わたしたちを天の存在者に結びつけるのは心(mind)です。それなのに多くの人は、心(mind)というこの宝物を入れる容器〔人体〕について理解しようとしなくて、一生を過ごしてしまいます。

身体の器官はみな心(mind)のしもべです。そして神経は、身体の各部に心の命令を伝達し、生きた機械の動作を導く伝令です。身体の構造を研究するときには、目的に対する手段のふしぎな適応性や、各種の器官の調和的な活動と相互依存に注意を向けなければなりません。生徒の興味をこのように目ざめさせ、体育の大切なことを理解させることができれば、教師は生徒の正しい発育と正しい習慣を確保する上に大いに役立つことになるのです」 家庭の教育386。

### 生きて主を迎える備えのために

「天にあげられる(昇天)に適した者となるために、神の民は自分自身を知らなければならぬ。彼らは詩篇記者と同じように「わたしは、おそるべく、くすしく造られているので、あなたをほめたたえます(欽定訳)」と叫ぶことができるために、自分の肉体の組立について理解しなければならない」HL 16

# ● 最後の七つの災害から 生き残る方法

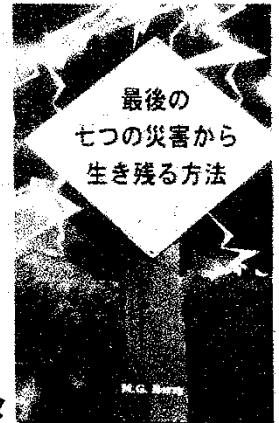
「かつてなかったほどの悩みの時」が、まもなくわれわれの前に展開する。それだからわれわれには、一つの経験—今われわれがもっておらず、また多くの者が怠けて持とうとしない経験—が必要なのである。...

今、われわれの大祭司がわれわれのために贖いをしておられる間に、われわれは、キリストにあって完全になることを求めなければならない」  
大争闘下396-397。

生きて主を迎える者たちがするこの特別な経験を著者は、聖書から分かりやすく解き明かす。

ダニエル12章の研究で、迫る危機を説く著者は、至聖所の大祭司に我々の唯一の希望があることを説く。第三天使の使命は警告と希望のメッセージであると言う。

価格: 400円



## ● キリストとサタンの「大争闘」

ポケットサイズ 1,800円  
ハードカバー 1,200円  
普及版 600円

## ● スタディ・バイブル

ファミリーバイブル <sup>18,000</sup> 180,000円  
大型サイズ 14,000円  
標準型 11,000円  
小型 8,000円

チャック式、スナップ式、普通

色は、黒、えんじ

詳しい情報はお問い合わせ下さい。

### トータルヘルスご購入のお勧め

日本厚生協会 出版文書部

トータルヘルス(本誌) :

健康の8原則と、ニュースタート健康法を基にした症状別の治療法など、より詳細な情報をお届け。

A4 12ページ 年6回発行

症状改善例集 : ニュースタート健康法で改善された方々の症例、より具体的な回復の秘訣、霊的な祝福など。B5 8頁

お申し込みは同封の振込用紙をご利用ください。なお、お急ぎで申し込まれる場合に、お電話やFAX、または、メールでのお申し込みでも構いません。

年間購読料 本誌「トータルヘルス」のみ、1,500円

症状改善例集と本誌「トータルヘルス」セット 2,000円

〒 370-1405 群馬県多野郡鬼石町三波川3964

TEL /FAX 0274-28-0670 メールアドレス nkki@mb.newweb.ne.jp

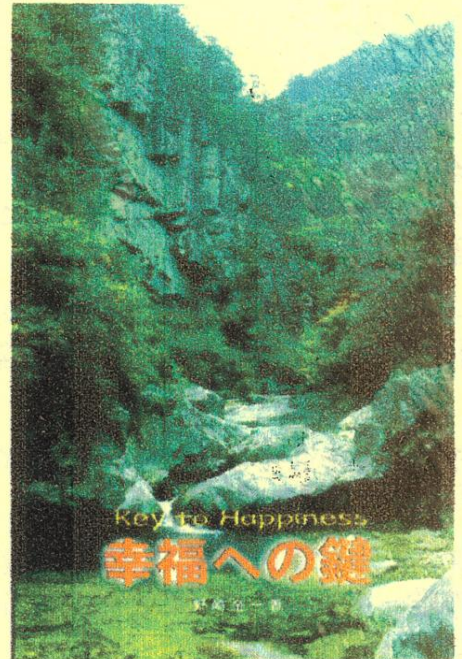
# 幸福への鍵 野崎金一著 (改訂版)

客観的教理の研究を軽視する傾向にある今日ほど、  
「健全な教理 (欽定訳)」 (テトス2:1) が必要と  
される時代はないと思います。

本書は聖書にもとずいて聖書の重要な真理—  
「現代の真理 (欽定訳)」 (2ペテロ1:12)  
のいろいろな主題を扱っています。  
現代の人の必読の書と言えましょう。

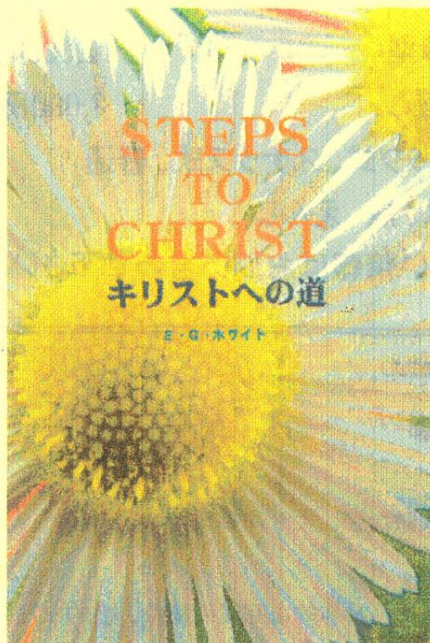
この本は無料 (送料別) です。  
欲しい方は下記の住所にご連絡下さい。

〒371-0246 群馬県勢多郡宮城村柏倉4192  
セブンスデー・アドベンチスト赤城教会  
Tel. 027-283-6315 Fax. 027-283-7571



— 伝道用に御活用ください —

# キリストへの道 E. G. ホワイト著 (日英対照)



本書は世界各国語に訳され、  
キリスト教入門書として  
愛読されているばかりでなく、  
すでに信仰に入っている方々にも  
更に深い真理の輝きを見せることでしょう。

欲しい方は下記の住所にご連絡下さい。  
表紙は3種類あります。

連絡先

セブンスデー・アドベンチスト教団  
教会活動部 (文書伝道部)

〒190-0011 東京都立川市高松町3-21-8  
Tel. 042-526-6822 Fax. 042-526-6301

発行所 サンライズ・ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471

Tel: 0980-56-2783 Fax: 0980-56-2881 E-mail: anchor@cosmos.ne.jp

郵便振り込み番号: 02080-0-12121 サンライズ・ミニストリー